

【專題論文】 Feature Article

DOI: 10.6163/tjeas.2014.11(1)49

アジア想像の思想史

The Intellectual History of the Imagined Asia[§]

緒形 康^{*}
OGATA Yasushi

關鍵詞：亞洲主義、脫亞、汪暉、亞洲的想像、竹內好、胡適、杜威、文明的生態史觀、韓毓海、「漫長的19世紀」

Keywords: Pan-Asianism, Datsu-A, Wang Hui imagination of Asia, Takeuchi Yoshimi, Hu Shi, John Dewey, ecological view of history, Han Yuhai, "The Long Nineteenth Century"

§ 本稿は、徐興慶編『近代東アジアのアポリア』（日本学研究会叢書8）（台北：国立台湾大学出版中心、2014年）に発表した同名の論文に、大幅な加筆修正を施したものである。

* 日本神戸大学大学院人文学研究科教授。

Professor, Graduate School of Humanities, Kobe University, Japan.

摘要

十九世紀後期日本的近代化過程之中，經常參考西方國家文明做為近代化的模範。戰前的亞洲主義和東亞聯盟的構想在西方文明的陰影之下，大多止步於「亞洲的想像」。但在一九四五年戰敗之後，受到中國革命的衝擊，竹內好（1910-1977）率先提出「東洋」這個概念欲與西方相抗衡。他主張近代化有數個型態，並且提議採用以亞洲的抵抗為主要內容的新模型。

一九六〇年代後期，反映日本高度成長的經驗，梅棹忠夫（1920-2010）提出從歐亞大陸的中心和邊緣思考世界文明的生態史觀。與竹內的模型相反，後者期望證明日本的近代化與亞洲社會的近代化之間異質性。然而，著眼於英國與日本同為歐亞大陸邊緣文明之相似處的觀點卻超越了梅棹自身的意圖，激發了日本知識份子將日本視為海洋文明的研究興趣。連帶著從以臺灣為首的亞洲海域的邊緣性來思考日本文明及其近代化的聲勢亦水漲船高。

竹內和梅棹所做的嘗試是將戰前「亞洲的想像」當作日本變革的主體條件落實於現實中，但在一九八九年中國大陸民主化運動失敗以及東歐社會主義體制崩壞之後，在日本人當中，現實世界的亞洲又似乎再度逐漸退縮回「想像中的產物」。再次落實亞洲的近代這個理念於現實世界中，對日本甚至全亞洲——尤其是東亞——來說，皆為相當緊要的課題。

Abstract

In the late 19th century, Japan often took Western countries as their models for modernization. Overshadowed by Western civilization, versions of pan-Asianism and East Asian alliance proposed before the end of WWII often constituted nothing more than the "imagination of Asia." However, after the defeat in 1945 and having received the impact of China's Communist revolution, Takeuchi Yoshimi (1910-1977) advocated the notion of "the East" (*toyō*) as an antithesis of the West. He claimed that modernization have multiple types and suggested a new model entailing Asia's resistance as its content.

Reflective of Japan's drastic economic growth in the late 1960s, Umesao Tadao (1920-2010) proposed his famous ecological view of history that contrasts the different paths of development between the center and peripheries of Eurasia. Contrary to Takeuchi's model, Umesao intended to show that Japan's modernization followed a route different from that of Asian societies in general. Nevertheless, quite to the surprise of Umesao, the view that expounds the similarities between Japan and Britain as two cultures peripheral to Eurasia aroused the interest of the Japanese intellectual to regard Japan as a maritime civilization; they started to situate Japan in the Asian oceanic region (with Taiwan at its head) and consider the relationship between geography and Japan's modernization. What Takeuchi and Umesao attempted to do was to bring the pre-war Asian imagination into reality to facilitate Japan's transformation. However, after the failure of China's 1989 movement for democratization and the collapse of the socialist polities of Eastern European countries, it seems that, for the Japanese, real Asia has fallen back into imagination again. Arguably, to re-examine Asia's modernity on the realistic ground is a critical issue for Japan and even for whole, particularly East, Asia.

1 アジア主義とアジア的生産様式論、戦後アジア論

日本の近代化にとって、アジアは常に躓きの石であり続けた。

ここで、私は、「近代」を、カール・マルクス (Karl Marx、1818-1883) やマックス・ウェーバー (Max Weber、1864-1920) の言う「普遍的近代」、すなわち自由、平等、博愛といった政治原理による共同体の創生という意味に限定して用いる。¹そうした観点からすれば、「西欧近代」とは、国家の中央集権化が進み、資本の海外展開を目指してアジア侵略が加速するにつれて「普遍的近代」を喪失した時代に他ならない。遺憾なことに、1853年以後の日本の近代化がモデルとしたのは、この帝国主義化した「西欧近代」であって、「普遍的近代」ではなかった。必然的に、日本の近代はアジアの土着の価値とは対立し、そうした価値や観念を浸食する働きをした。

「西欧近代」からすれば、土着アジアはやがて消滅すべき遅れた遺物であった。身分と俸禄を剥奪された旧武士階級がそれを象徴していた。アジアの復権の主張（それは後にアジア主義と称されるようになる）が士族の反乱と並行して生まれるのには理由がある。

1895年は、アジア主義にとって一つの転機であった。樽井藤吉 (1850-1922) が『大東合邦論』において朝鮮と日本の連合政府の主張を唱える一方で、福沢諭吉 (1835-1901) はアジアの悪友を謝し欧米に追随する脱亜の言論を繰り広げた。以後、日本の近代化をめぐる言説には「興亜」と「脱亜」の2つの主張が複雑に絡み合うようになった。

¹ 「普遍的近代」の考え方については、石井知章：『中国革命論のパラダイム転換——K・A・ウィットフォーゲルの「アジア的復古」をめぐる』(東京：社会評論社、2012年)の「終章」を参照。

「脱亜」の考え方は、「西欧近代」の価値観から必然的に要請されるものだった。他方で、「興亜」の考え方は、「西欧近代」の帝国主義的なアジア侵略に対抗する思想として生まれた。もっとも、土着アジアの価値観を守るために、アジア諸国がどのように連帯するかという問題に関して、「興亜」はアンビヴァレントな感情を抱えていた。それは、東アジアの文明の源泉である中国とどのように向き合うかをめぐるとの意見の相違であった。明治初期には広く見られた中国を盟主としてアジアが「西欧近代」の侵略に抵抗するという構想は、1895年の日清戦争終結後ほとんど影をひそめ、日本を盟主とするアジア連帯が論証抜きで主張されるようになった。

明治から大正へと転換する1910年代には、こうした日本盟主論とセットになったアジア主義の思想が右翼と左翼に分裂した。海外戦争から撤退すべきであるという非戦論を背景に生まれた社会主義 (Socialism) やアナキズム (Anarchism) の思想は、アジア主義の左翼として、アジアにおける被抑圧階級の連帯を目指すようになる。それは、満蒙侵略という国策と結びつくようになったアジア主義 (Pan-Asianism) の右翼とは一線を画するものだった。けれども、幸徳秋水 (1871-1911) にせよ、片山潜 (1859-1933) にせよ、そのアジア連帯の思想には、抜きがたいアジア民衆蔑視、とりわけ朝鮮人蔑視が顕著であった。²

1920年代にマルクス主義 (Marxism) が勃興すると、アジア主義はほとんど右翼が独占するようになり、アジア被抑圧階級の連帯というアジア主義左翼の思想は、国際共産主義運動 (International Communist Movement) と結びついて、マルクス・レーニン主義政党 (Marxist-Leninist Party) が推進することになった。しかし、ここでも、土着アジアには不幸な運命が待ち構えていた。

² 裴京漢：「東アジア史上の辛亥革命」、辛亥革命百周年記念論集編集委員会 (編) 『総合研究 辛亥革命』 (東京：岩波書店、2012年) 所収を参照。

1920年代、中国大陸では国民党と共産党の連立政権が国民革命を推進し、1928年には国民党を中心とする統一政権が誕生した。その過程で、共産党は1927年に連立政権から追放され、27年後期より国民党との武装闘争を展開していた。この国共合作の成立と崩壊の動きに、ソ連及び国際共産主義運動の司令塔であるコミンテルン（Comintern）内部の権力闘争が重なった。1920年代の初期中国共産主義運動は、土着アジアの問題を重視し、中国の歴史を動かしてきた要因として、アジア的生産様式論に基づき、農業生産に必須の水資源を独占する強大な政治権力と、そうした政治権力に従属する農村共同体の存在に注目する論争を展開した。だが、1928年の党大会は、ソ連とコミンテルンの指示のもと、こうしたアジア的生産様式論による中国史の分析を退け、世界史の普遍的法則である古代的・封建的・資本主義的・社会主義的な生産様式の展開の中で中国史を議論することが決定された。中国史は「半植民地、半封建」を乗り越えるという革命目標に従って議論されるようになり、アジア的なものを考察の対象とすることは否定されるに至った。³

アジア的生産様式論の否定は、ソ連とコミンテルンの動向とも相俟って、日本のマルクス主義者の革命戦略を大きく変える。日本共産党の1927年テーゼから32年テーゼへの変遷は、その顕著な例で、日本の天皇制は、土着アジアの観点からではなく、封建的な遺制として打倒の対象とされた。そして、このアジア的なものを封建的なものに読み換える試みの先に、1930年代のマルクス主義者の一斉転向、天皇制容認、アジア太平洋戦争への積極的関与が生まれたのであった。

アジア太平洋戦争終結後の日本は、戦前の「興亜」の伝統を完全に切り捨てた。「西欧近代」に代わって「アメリカ近代」が、近代化のモデルとなった。戦後のアジア論は、戦前のアジア主義ではなく、アメリカのエリア・スタディーズ（地域研究）が担った。それは、アジア主義が

³ 緒形康：「一九三〇年代の封建遺制論争、資本主義論争におけるアジアの影」、緒形康（編）『アジア・ディアスポラと植民地近代——歴史・文学・思想を架橋する』（東京：勉誠出版、2013年）所収を参照。

土着アジアの価値や文化を重視した姿勢とは異なり、現地観察やフィールド・ワーク (field work) に基づいて「客観的」にアジアを観測する行為であることを標榜するものだった。⁴この「客観的」な営みの背後に、冷戦体制におけるアメリカの世界戦略が厳然と存在していたことは言うまでもない。

2 アジアの言説と「アジア想像」

こうした戦前のアジア主義、アジア的生産様式論や、戦後のアジア論について、それらが「アジア想像」という想像されたものにすぎず、その言説が植民地主義と帝国主義を隠蔽する装置でしかなかったという議論が、被侵略地域である中国大陆・台湾・韓半島において語られてきたのは、以上の歴史的経緯を見る限り、半ば必然の事態であった。

現代中国における新左派の論客である汪暉 (1956-) の「アジア想像の政治」 (1992年) は、そうした被侵略地域のアジア主義懐疑論をアジア主義解消論にまで徹底させた重要な著作と言えるであろう。

汪暉はここで、日本の「大陸政策」を基軸として発展した植民地主義的なアジア構想に対して、「民族解放運動と社会主義運動を中心とするアジア社会革命」を提示し、後者の構想に、21世紀の「新帝国」秩序を打破する可能性を見出している。そうした革命的アジア像が結実化されたヴィジョンは、具体的に列挙すれば、レーニンが辛亥革命で提起した「遅れたヨーロッパ、進んだアジア」の宣言、孫文 (1866-1925) の大アジア主義演説、中国革命における土地革命などに表明されていた。汪暉によれば、こうした社会革命に基づくアジア構想こそが、日本のアジア

⁴ 加々美光行：「現代中国学の新たなパラダイム——コ・ビヘイオリズムの提唱」、『現代中国学の新しいパラダイムをめぐって』 (2007年度国際シンポジウム報告書) (愛知：愛知大学国際中国学研究センター、2008年) あるむ、所収を参照。

主義などの主張の背後にある植民地主義や帝国主義の負の遺産を真の意味で克服する役割を果たしたのである。⁵

日本における「アジアの想像」が、帝国・国民国家・資本主義という3つの機制から構成されていると汪暉が述べるとき、彼は16世紀以後に生じた近代世界システムを念頭に置いていた。しかし、彼は、近代世界システムがその後の世界史を動かす唯一の要因であるとは考えていない。近代世界システムを構成する帝国・国民国家・資本主義に対抗する運動として、彼は、共和国・多民族国家・社会主義というもう一つの機制を考えているように思われる。

こうした三位一体のシステムを創生したのが、10世紀以後の中国（北宋）であるという宮崎市定（1901-1995）の見解に同意しつつ、汪暉は、明末清初の16世紀に、近代世界システムの登場と並行する形で、征服王朝であるユーラシア帝国（大清帝国）が新しい世界秩序形成のアクターとして世界史の舞台に登場し、1911年のアジア初の共和国創成を帰結したことに注目するのである。

なるほど、共和国・多民族国家・社会主義という対抗運動は、中国革命を世界へと輸出し、アメリカ中心の（そして1989年までは米ソ共同戦略としての）グローバリズム（Globalism）に対抗するシステム変革の運動を組織しえたことは事実である。アジア、特に東アジアの地政空間において、その運動は、国境を越えた社会民主主義的な対抗運動で長くあり続けた。しかし、その中国革命の対抗運動の司令塔であった毛沢東（1893-1976）は、決して自らの運動が、大清帝国の多民族国家体制を継承したものであるとは言わなかった。かつての多民族国家体制は「封建的専制体制」に他ならず、人民共和国は、そうした専制体制による人民搾取を否定して生まれた、「人民に服務する」清新な新生国家であったからである。アメリカ中心のグローバリズムへの対抗運動を歴史的に根

⁵ 汪暉：「アジア想像の政治」、村田雄二郎・砂山幸雄・小野寺史郎（訳）『思想空間としての現代中国』（東京：岩波書店、2006年）、頁118・181。

拠付けるために、共和国以前の帝国システムに言及し、その史上最大の版図を現代中国が継承する現実を肯定的に捉え、「中華民族」の歴史的起源をそれら帝国の原理に求めたとき、共和国・多民族国家・社会主義という対抗運動は、近代世界システムを乗り越えるどころか、21世紀の「新帝国」建設に奉仕するものとなる。

日本においても、汪暉のアジア主義解消論に似た議論が展開されることはある。例えば、坂野潤治（1937-）は2013年に再版した『近代日本とアジア——明治・思想の実像』⁶の中で、アジア主義の背後に、独自の「思想」や「価値観」を見出すことは不可能ではないかという心情を告白している。むしろ、戦前日本の対外観や外交政策は、「日本のアジア膨張に対する中国の抵抗が強いときには、日本のアジア政策は「脱亜論」的に正当化され、中国の抵抗が弱いときには、「アジア主義」的色彩が強くなる」⁷という形態を採り、「アジア主義」=連帯、「脱亜論」=侵略といった単純な二分法とはかけ離れたところで展開されたことを強調するのである。

柄谷行人（1941-）は、征韓論（1874年）の背後に、日本革命の輸出を見出し、この日本革命の海外展開への志向にアジア主義の淵源を見ている。⁸坂野が整理した、福沢諭吉による壬午・甲申事変期の朝鮮改造論や、山県有朋（1838-1922）による辛亥革命前後の対袁世凱（1859-1916）政策は、そうした日本革命の延長上にある。汪暉の言う中国革命戦略に似たヴィジョンを近代日本も有していたのである。にもかかわらず、このヴィジョンは植民地主義や帝国主義をその主要な動機としており、そこに独自の「思想」や「価値」を見出すことが難しいのも事実である。もっとも、このことは、共和国・多民族国家・社会主義という三

⁶ 坂野潤治：『近代日本とアジア——明治・思想の実像』（ちくま学芸文庫）（東京：筑摩書房、2013年）。

⁷ 坂野潤治：『近代日本とアジア——明治・思想の実像』、頁155。

⁸ 柄谷行人：『歴史と反復』（『定本 柄谷行人集』、第5巻）（東京：岩波書店、2004年）、頁72。ここで柄谷が述べる「日本革命」とは、西南戦争を惹起した征韓論を指している。

位一体が、帝国・国民国家・資本主義という機制と共犯関係にあるのと何ら異なるものではない。日本の近代化においても、そうした革命の二重戦略（他者の侵略を通じて自らを解放するという戦略）は不可避の事態であったとも言えるのだ。しかし、このことを理由に、アジア主義の思想を「想像的なもの」という名のもとに全否定することはできないように思われる。その思索の全過程においてアジア主義の可能性を追求し続けた竹内好（1910-1977）に即して、改めてそのことを考えてみよう。

3 後進国アジアの近代化の2つの型

1945年の敗戦後、中国革命の衝撃を受けて、竹内好は、西洋への抵抗としての「東洋」という概念を初めて打ち出した。1948年11月、東京大学東洋文化研究所編『東洋文化講座』第3巻に掲載された「中国の近代と日本の近代——魯迅を手がかりとして——」⁹が、それである。彼は、ここで、後進国アジアの近代化には幾つかの型があると主張し、アジアの抵抗の強弱に基づいて、近代化の新しいモデルを提示した。後年、国際基督教大学アジア文化研究委員会で行った講演筆記「方法としてのアジア」では、その観点が次のように要約されている。

「日本は、見かけは非常に近代化しているようであるけれども、その近代化は根が浅い。このままではおそらく日本は破滅するだろう」。¹⁰「中国の近代化は非常に内発的に、つまり自分自身の要求として出て来たものであるから強固なものである」。¹¹

⁹ 『現代中国論』（1951年）に再録される際、「近代とは何か（日本と中国の場合）」と改題された。『竹内好全集』第4巻（東京：筑摩書房、1980年）所収を参照。

¹⁰ 竹内好：「方法としてのアジア」、『日本とアジア』（ちくま学芸文庫）（東京：筑摩書房、1993年）、頁451、原著は武田清子（編）『思想史の方法と対象』（東京：創文社、1961年）に発表された。

¹¹ 竹内好：『日本とアジア』、頁453。

「私は、近代化の二つの型を考えた時に、こういう問題を考えるには、今までのように日本の近代化というものをいつも西欧の先進国との比較だけで考えるのではいけないのではないか、と思いました」。「そういう単純な比較ではいけない。自分の位置をはっきり掴むのに十分ではない。少なくとも中国とかインドというような、日本と違った道を歩んだ別の型をもって来て、三本立にしなればいけないだろうということ」を当時から考えていたのです。¹²

戦前のアジア主義が、アジア連帯の中心を中国に置くか日本に置くかでアンビヴァレントな感情を抱いていたことは、すでに述べた。竹内好による後進国近代化の2つの類型論は、日本近代初期以来のアンビヴァレントな感情を解消し、日本と中国の近代化が全く別のものであると述べたのである。日本近代を中国近代とは厳密に区別した上で、日本近代化の内発的発展を模索した点で、竹内の考えは、土着アジアを切り捨てたまま近代化の道を進んでいた1950～60年代の日本への警鐘たり得た。

しかし、この戦後日本の特異な思想が、竹内の独創ではないことに注意する必要がある。彼は、この後進国近代化の類型論のヒントを、ジョン・デューイ（John Dewey、1859-1952）が五四運動（1919年5月4日）期に発表した中国文化論から得たことを、先の講演記録（「方法としてのアジア」）で告白している。デューイの議論は、1919年5月以後、滞在先の中国から母国の子供に宛てた書簡をまとめた*Letters from Japan and China*（1920年）という書物で語られたものだという。日本訪問直後に接した中国に対するデューイの第一印象は決して良いものではなかった。五四運動の渦中にある中国は「不潔であって混乱して」¹³いた。しかし、この第一印象は、中国観察の途上で劇的に変わってゆく。

「手紙ではまだはっきりしないのですが、一九二〇年から二一、二年にかけて、書いている評論、これは私、前に読んでなくて、戦後に人か

¹² 竹内好：『日本とアジア』、頁454。

¹³ 竹内好：『日本とアジア』、頁451。

ら借りて読んだのですが、『キャラクターズ・アンド・イヴェンツ』(Characters and Events)¹⁴の中の一冊が、日本と中国についての評論を集めております。それを読んで、彼の日本および中国の比較がよくわかりました。手紙とちがって、これらのエッセイは、問題を深いところからつかまえておりました、教えられました」。¹⁵

こう語った上で、デューイの日中近代化の比較論が紹介されるのだが、その内容は1948年に発表された竹内の記念碑的傑作「中国の近代と日本の近代」と驚くほど似ているのである。

「日本は、見かけは非常に近代化しているようであるけれども、その近代化は根が浅い。このままではおそらく日本は破滅するだろうということを彼は予言しております」。¹⁶

このデューイのコメントを知った時期について、竹内は、「戦後に人から借りて読んだ」とも、「敗戦後に読んだ、ということもありましたが、感銘しました」とも明かしている。そもそも、彼がこのデューイの文章に触れるきっかけとなったのは、デューイが中国からアメリカの娘に宛てた書簡集なのだが、竹内はこの書簡集を、やはり「戦後に初めて読んだ」のである。

今試みに、竹内日記の戦後の部分をひもとくと、1948年8月30日の項には、こうある。

思想の科学の会に出席、Deweyの話。渡辺、南、大久保、鶴見和子氏らにあう。¹⁷

¹⁴ John Dewey, *Characters and Events: Popular Essays in Social and Political Philosophy*, Joseph Ratner (ed.) (New York: H. Holt and company, 1929).

¹⁵ 竹内好：『日本とアジア』、頁451。

¹⁶ 竹内好：『日本とアジア』、頁451。

¹⁷ 竹内好：「浦和日記」(1948年) (『竹内好全集』、第16巻) (東京：筑摩書房、1981年)、頁38。

渡辺、南とは、渡辺慧（1910-1993）、南博（1914-2001）を指し、思想の科学の会とは1946年に創設された「思想の科学研究会」を指す。最初の同人は、鶴見俊輔（1922-）、鶴見和子（1918-2006）、武谷三男（1911-2000）、武田清子（1917-）、都留重人（1912-2006）、丸山真男（1914-1996）、渡辺慧の7名であった。竹内がデューイの書簡集のことを知ったのは、思想の科学研究会を通じてかもしれない。もっとも、竹内と思想の科学研究会との接触はこれが初めてではなく、日記によれば、1948年6月24日、『思想の科学』合本ⅠⅡを購入しているし、7月8日には、松田智雄（1911-1995）の『近代の史的構造』とともに、「プロシア型の問題」を研究するため、『思想の科学』6月号を購入してもいるのである。

「中国の近代と日本の近代」が『東洋文化講座』第3巻（白日書院）に発表されるのは同年11月であり、執筆の機縁は、竹内自身の説明によれば、1947年11月15日に東洋文化研究所公開講座にて、講演「中国における近代意識の形成——魯迅の歩いた道」を行った際、同講座の主宰者、飯塚浩二（1906-1970）から、これを自由に膨らませて執筆するよう勧められたことによる。¹⁸

これを受けて、竹内は1948年1月30日に、「『東洋文化』のための予備稿の写し百枚を書きあげる」が、決定稿完成までには曲折があった。「『東洋文化』の原稿百枚に着手しなければならぬと思うが、気分が乗らない」（2月18日）、「今日も何ということなくて、雑書をよみくらす。原稿はまだ手がつかぬ」（2月23日）、「『東洋文化』の原稿まだ着手できない、考えがまとまらない」（3月3日）という状態で、ついに飯塚浩二より3月4日に原稿の催促があり、3月20日の提出を約束することになる。しかし、3月11日にも「『東洋文化』の原稿、期日が迫っているが、まだ着手でき」ず、14日にも「原稿まだ手がつか」ず、20日の締切りを過ぎても「原稿少しも捗らぬ」（21日）という次第となった。それ

¹⁸ 竹内好：『日本とアジア』、頁471。

でも4月4日には「原稿、今日までにようやく四十五枚」となり、以後、1日1-3枚のペースで書き継ぎ、12日に至って「ようやく七十枚、本日一気に十枚あまり書き、午前三時までかかって八十枚でおわる」。¹⁹

4月13日午前中に原稿を手直しし、竹内は「午後から雨のなかを」、東洋文化研究所に届けに行った。飯塚浩二は不在だった。

ゲラが出たのは8月26日である（この間、6月13日に太宰治（1909-1948）が自死している）。27日に48頁まで校正を済ませるが、校了日時は書かれていない。同論文が掲載された『東洋文化講座』第3巻2冊と「ぬきずり十冊」を受けとるのは、11月27日であった。11月30日付での抜刷送付先は、元山俊彦、安田武（1922-1986）、鈴木均（1922-1998）、小田切秀雄（1916-2000）、佐々木基一（1914-1993）、鶴見俊輔（1922-）の5名。うち、安田、鶴見の2名は思想の科学社との関係者である。

デューイについて思想の科学社で議論した8月30日以前に、竹内は『思想の科学』誌上のデューイを始めとするプラグマティズム（Pragmatism）の論議に6月から注目していた。その時期は、4月13日の初校提出から8-9月校了までの数ヶ月の間にすっぽり収まっている。中国と日本の近代化の類型論を悪戦苦闘しながら完成する過程で、竹内が、デューイの仮説を用いて自説を補強した可能性はかなり大きい。

しかし、竹内の後進国近代化論には、もう一つ、彼自身が語ることのなかった重要な来源がある。それは、デューイに師事した胡適（1891-1962）の中国・日本比較文化論に他ならない。

1919年のデューイ訪中の主なスポンサーは、北京大学哲学会であり、胡適はその招聘の中心人物だった。『新青年』第7巻第1号（1919年12月）より、胡適はデューイ訪中時の講演を「社会哲学と政治哲学」とし

¹⁹ 竹内好：「浦和日記」（1948年）（『竹内好全集』、第16巻）、頁7-19。

て連載している。その内容は、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell、1872-1970) の個人主義的な自由主義哲学を批判して、コミュニケーション理論 (theory of communication) にも似た政治権力論を提示するもので、政治における権力のリーダーシップを重視していた。社会主義とも親和的なその議論は、竹内が戦後初めて知ったデューイ書簡に披歴された、日本の近代化の皮相さを批判する論点とも相通じるものであった。

季羨林 (1911-2009) 主編『胡適全集』²⁰の第40巻に収録するデューイ宛て胡適書簡 (1940年3月11日)²¹は、さらに興味深い事情を明らかにしてくれる。

五四運動期に生まれたデューイの中国型近代への共感は、抗日戦争期にはさらに増幅された。周知のように、この時期、駐米大使胡適は、ファースト・レディ宋美齡と共に、日本の軍国主義やファシズム (Fascism) を痛烈に批判し、アメリカの対日参戦をアメリカ世論に精力的に訴えていた。3月11日の書簡は、その渦中で書かれている。ここで胡適は、抗日戦争を、自由主義のファシズムに対する聖戦と捉え、英米自由主義を擁護する闘いにプラグマティズムを援用すべきことを師に訴えたのである。

果たして、師のデューイは、この中国の優秀な弟子の要望に応えた。1942年の “The One-World of Hitler’s National Socialism” (「ヒトラーの国家社会主義における一元的世界」)²²において、彼は、ナチズム (Nazism) 批判において自らのプラグマティズムを積極的に援用する決意を語るに至った。それは、1941年の “The Conflict of Ideologies” (「イデオロギーの衝突」) の中で、中国の自由主義的近代

²⁰ 胡適：『胡適全集』、季羨林 (編) (合肥：安徽教育出版社、2003年)、全44巻。

²¹ Hu Shi, "To John Dewey (March 11, 1940)," 季羨林 (編) 『胡適全集』第37巻、頁24-26。

²² John Dewey, "The One-World of Hitler's National Socialism," in Jo Ann Boydston (ed.), *The Middle Work, 1899-1924*, Volume 8 (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1978), pp. 421-426.

代によって日本の反動的近代を消滅させる必要性を説いた胡適の考えに呼応するものに他ならなかった。

左翼と右翼——マルクス・レーニン・スターリンの共産主義イデオロギーと、ファシスト・イタリアやナチ・ドイツのイデオロギーの間に衝突があるだけではない。より現実的で、より根源的な衝突が起ころうとしている。なぜなら、全体主義システムが、彼らの共通の対立物であり、共通の敵であると考えられるもの、すなわち、民主主義的な観念・理想・実践・制度を非難し、敵対し、破壊しようと企てているからである。²³

すでに、1933年7月、シカゴ大学ハックス講座で行われた胡適の連続講演“Types of Cultural Response”（「中国の文芸復興」）第1講は、日本の近代化はその効率性において優れているが、その深さと徹底度においては中国の近代化には及ばないという観点を語っていた。²⁴

日本が短期間に近代化に成功した要因は、第1に、改革を実現する強力な統治階級が存在したこと、第2に、統治階級を構成する「武士」が尚武の気性を有し、西洋列強の侵略を効果的に防御したこと、第3に、過去千年に及ぶ日本独自の封建制が新しい政治モデルに対して安定した基礎を提供したことにある。

にもかかわらず、日本の西洋化の度合いは中国に比してもはるかに不徹底である。日本の西洋化が「中央集権式」であるのに対して、中国の西洋化は、日本とは違って、2000年前に封建制を克服した結果として、

²³ Hu Shi, "The Conflict of Ideologies," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 218 (Nov., 1941), p. 27, DOI: 10.1177/000271624121800104, 『胡適全集』第38巻、頁213。

²⁴ Hu Shi, "Types of Cultural Response," 季羨林（編）『胡適全集』第40巻、頁570-571。

社会構造の「平民化」が徹底していたが故に、「広がりを持った深さ」と「広がりを持った同化」の2つを実現できたからである。²⁵

1938年の講演“The Westernization of China and Japan”（「中国と日本の西洋化」）では、中国における近代化の過程そのものの「自発性」がさらに強調される。²⁶確かに、中国における社会構造の「平民化」は、システムの非効率と浪費を生み、近代化の速度において日本に一籌を輸することになったが、「平民」レベルでの文化受容は、合意のもとに進められる「理性」主義に基づいていたから、文化衝突に伴う心理的葛藤も日本に比べてはるかに少なかったことが強調された。²⁷

こうしたプロパガンダ活動を経て、日本と中国の近代化について、42年に、次のような胡適による公式化がなされることになったのである。

(1) 中国は21世紀前に統一された大帝国を形成した際、封建制を捨て去った。一方、当時の日本は19世紀半ばにペリーが門戸開放を迫るまで、十分に発達した軍事封建制度の絶頂期にあった。

(2) 中国は2000年のあいだほとんど階級の存在しない社会構造を発展させ、政府の官僚は国家公務員試験の公開かつ競争的な制度を通じて選抜された。一方、日本は少なくとも過去800年のあいだは軍事特権階級によって支配された。彼らは支配階級の地位を脅かされることなく独占してきたのである。

25 Hu Shi, "Types of Cultural," 季羨林（編）：『胡適全集』第40巻、頁51。

26 Hu Shi, "The Westernization of China and Japan," 季羨林（編）『胡適全集』第37巻、頁454-467。

27 周質平：「胡適筆下の日本」、『胡適与中国現代思潮』（南京：南京大学出版社、2002年）所収を参照。

(3) 中国はその権力と勝利の絶頂期においてさえ、戦争という手段を鼓吹せず、一貫して戦争と帝国主義的な領土拡張を非難してきた。一方、大陸侵略と世界征服は長らく軍国日本の国家理想であった。

こうした対照的な歴史事実は、中国と日本の生活と文明に関して多大の示唆を与える。2つの人民の国家生活と制度はそれらによって形成され陶冶されたのである。端的に言えば、それらは中国を民主主義的な平和国家に作り上げ、日本を全体主義的な軍事国家に作り上げたのだ。²⁸

この一節を、竹内好が「中国の近代と日本の近代」に記した、余りにも有名な次の一節と比較してみよう。

回心は、見かけは転向に似ているが、方向は逆である。転向が外へ向う動きなら、回心は内へ向う動きである。回心は自己を保持することによってあらわれ、転向は自己を放棄することからおこる。回心は抵抗に媒介され、転向は無媒介である。回心がおこる場所には転向はおこらず、転向がおこる場所には回心はおこらない。転向の法則が支配する文化と、回心の法則が支配する文化とは、構造的にちがうものだ。

私は、日本文化は型としては転向文化であり、中国文化は回心文化であるように思う。²⁹

28 Hu Shi, "China, Too, Is Fighting to Defend a Way of Life," 季羨林 (編) 『胡適全集』第38卷、頁54。

29 竹内好: 「近代とは何か (日本と中国の場合)」、頁162-163。

見られるように、竹内の後進国近代化論は、デューイの議論を参照しながら、中国と日本の政治文化システムの相違をその歴史的由来から考察し、両国の近代化が全く異なるものであることを論証した胡適の議論に深く学んだ形跡がある。ここに顕著なのは、戦前以来の「興亜」か「脱亜」かというアジア主義の不毛な二項対立を、アジアの2つの地域の歴史文化の相違から乗り越えようとする健全な相対主義であった。

4 「アジアの想像」から「現実のアジア」へ

1957年に、世界の文明をユーラシア大陸の中心と周縁から考える生態史観が、梅棹忠夫（1920-2010）によって提起された（『文明の生態史観』）。³⁰それは竹内好とは対照的に、日本の近代化がアジア社会の近代化とは異質であることを証明しようとするものであった。戦前からの「脱亜」の思想を、梅棹は生態史観によって跡付けようとした。福沢の「脱亜」論が、日清戦争の勝利を文面の野蛮に対する勝利という根拠薄弱な論理によって正当化したのとは対照的に、梅棹は、日本がアジアと異質な理由は、「ユーラシア大陸」における遊牧民の略奪と征服の歴史の中で生産の蓄積が行われなかった事態と日本が無縁であったことに求められると述べたのである。

イギリスと日本というユーラシアの周縁文明の近似性に注目するその視点は、梅棹自身の意図を超えて、海洋文明としての日本文化への識者の関心を生み出した。川勝平太（1948-）の『文明の海洋史観』（1997年）³¹が、その代表的作品である。台湾を始めアジア海域の周縁性から、日本の文明や近代化を考える気運がこれ以後高まることになった。

30 『中央公論』誌上の議論が単行本化されたのは1967年であった。梅棹忠夫：『文明の生態史観』（東京：中央公論社、1967年）。

31 川勝平太：『文明の海洋史観』（東京：中央公論社、1997年）。

上田信(1957-)は、川勝の作品を通底する思想について、次のように要約している。

16世紀までは、西欧社会も日本も海洋アジアという物産の供給地に対しては周辺地域にすぎず、銀を対価に海洋アジアから解放されようと、両地域は生産力向上へ向かう。その方法は西欧と日本では異なる。人口が稀少であった西欧社会は労働の生産性を上げるべく技術集約的な方向に進み、産業革命を達成した。それに対して、人口の多い日本では、労働を多用する勤勉革命が起きたとする。産業革命と勤勉革命とによって、西欧と日本とは海洋アジアに対する従属的な位置から脱却したとする。³²

竹内や梅棹、川勝が試みたのは、戦前の「アジアの想像」を日本の変革の主体的条件として現実化することであったが、1989年における中国大陸の民主化運動の挫折と東欧社会主義体制の崩壊後、「現実のアジア」は、日本人の中で再び「想像的なもの」へと退行しつつあるように見える。アジアにおける「普遍的近代」の再現化は、日本のみならずアジア、特に東アジアの喫緊の課題であると言えるが、ここでは、そうしたアジアを「想像的なもの」から再び現実へと引き戻そうとする1つの試みとして、中国大陸の思想家、韓毓海(1965-)の議論を紹介しておきたい。

2009年12月、韓毓海の大著『500年間、誰が歴史を書いたのか——1500年以來の中国と世界』³³が出版された。500年の世界史とは大航海以來の世界資本主義システムの支配する時代である。中国にあっては明末清初

32 上田信：「文明史としての中国近現代史」、飯島渉・久保亨・村田雄二郎(編)『シリーズ 20世紀中国史 4 現代中国と歴史学』(東京：東京大学出版会、2009年)、頁159。

33 韓毓海：『五百年來誰著史——1500年以來の中国と世界』(北京：九州出版社、2009年)。ここでは、大幅に加筆修正された「増訂本」(北京：九州出版社、2010年)を用いる。

以来、清朝中期の繁栄を経て、西洋列強の半植民地化に呻吟する苦難の時代である。これまでの世界史記述が問題にしてきたのは、過去にどのような出来事が起こったか、そうした出来事の意義は何かということであった。しかし、韓毓海が問題視したのは、そうした世界史記述は「誰」によって書かれたかということである。歴史的事実が事実として認知されるには、事実を因果関係に基づいて記述する記述者の視点が不可欠である。事実は客観的で不動であるとは限らない。視点が相違すれば事実は変わるのではないか。イタリアのマルクス主義者アントニオ・グラムシ（Antonio Gramsci, 1891-1937）が述べたように、それは歴史記述のヘゲモニー（Hegemony）問題に帰着する。では、世界資本主義システムの500年間を記述したのは「誰」なのか。それは「世界市場と資本主義を勃興させた企業家・資本家」³⁴に他ならない。

この世界史記述のヘゲモニー問題を明らかにするために、韓毓海は「長い16世紀」、「長い19世紀」という概念を用いた。前者は中国経済史におけるカリフォルニア学派を代表するケネス・ポメランツ（Kenneth Pomeranz, 1958-）『大分岐——中国、ヨーロッパと近代世界経済の形成』（*The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, 2000年）³⁵から、後者は『新左翼評論』（*New Left Review*）の重鎮であった故ジョヴァンニ・アリギ（Giovanni Arrighi, 1937-2009）『近代世界システムの混沌と支配』（*Chaos and Governance in the Modern World System*, 1999年）³⁶からヒントを得たものである。

「長い16世紀」とは、1350～1850年の500年間を指し、世界貨幣システムが銀本位制から金本位制へと移行する過渡期である。明朝は1567年にそれまでの海禁政策を放棄し、南洋貿易へと踏み出した際、白銀（紋

34 韓毓海：『五百年來誰著史——1500年以来的中国与世界』、頁21。

35 Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2000).

36 Giovanni Arrighi et al. (eds.), *Chaos and Governance in the Modern World System* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1999).

銀)を貿易決済の手段とした。以後、18世紀半ばには世界に流通する白銀の実に3分の1を独占しながら、貨幣主権を掌握することには失敗し、銀資本の海外流出を止める手立てを欠いたまま、1850年前後に至って、イギリスの金本位制を柱とした近代世界経済へと強制的に編入される。このように貨幣主権を次第に喪失し、国家経済のイニシアティブを外国に奪われたことが、19世紀以後の中国の半植民地化を決定付けたのであり、従来のマルクス主義経済学が仮定したようにアヘン戦争(1840-1842)による従属的地位への転落は突然に始まったものではないというのが、韓毓海の見方である。

ここから現代に続く「長い19世紀」が始まる。「長い19世紀」とは、1688~1689年のイギリス名誉革命から1915年の第一次世界大戦終結までの社会構造を内容とし、西欧社会とアジア・アフリカ社会の不均衡を背景に、西欧社会がアジア・アフリカ社会の植民地化と富の収奪を通じて自身の社会の市民社会を主な担い手とした国民国家形成を進めた時代である。トマス・マルサス(Thomas Malthus、1766-1834)の人口論が仮定した、無限級数的に膨張する人口爆発に対応した国民総生産の向上というテーゼが、この不均衡を内包した近代世界経済のメカニズム(Mechanism)を象徴している。

500年の世界史記述における文化ヘゲモニーとは、「長い19世紀」を推進した人々が、その近代世界経済のメカニズムの淵源を、自らとは起源を異にする「長い16世紀」に投影した結果である。近代世界システムにおける中心と周縁の力学を、明朝が海禁政策を放棄した前後の大航海時代に投影した結果である。世界市場と資本主義という19世紀の成果の起源を16世紀に求めた結果とも言える。「長い19世紀」という文化ヘゲモニーの存在はこうして「長い16世紀」の文化ヘゲモニーに置き換えられ、近代世界経済の優位性があたかも16世紀まで遡ることができるかのような錯覚を与えることになった。言うまでもなく、そうした転倒は「長い19世紀」の文化ヘゲモニーを掌握した西欧の企業家・資本家たちが企図した試みであった。

「長い19世紀」は、不均衡を内包した近代世界経済がその不均衡を解消するために大規模な国家間の総力戦を必要とした時代に他ならない。この時代に世界経済の高度成長が可能であったのは、戦争による自然や富の破壊と再生を繰り返したからであって、近代自由主義経済学が述べたように、自由な世界市場における生産と消費のメカニズムが有効に機能したからでは決してない。むしろ、「長い16世紀」において世界経済の中心であった明清中国の方が、小農経済の「勤勉革命」（川勝平太）に基づく、より高度な生産力を維持していた。

これまでの世界史記述を転換させる新しい世界史記述は、「誰」によって担われ、どのように記述されるべきか。その方途は明らかである。「長い19世紀」によって転倒され隠蔽された世界史を、「勤勉革命」の担い手であるアジアや中国の小農階級の手に取り戻し、アジアと中国の基層社会から、アジアの「勤勉革命」の歴史を再記述すること³⁷が、それである。そして、韓毓海によれば、そうした新しい500年の世界史は、1949年の毛沢東の決断の中に実現されているのである。なぜなら、国家の貨幣主権を回復し、中国が財政国家として国際金融市場におけるイニシアティブを行使できる基礎作りは、1948年12月31日、人民元を創始して、国際収支決済における中国の主導権を確保したことで可能になったからだ。³⁸

500年の世界史の省察を目的とする書物は、ここに及んで、現代中国が毛沢東の下に1949年以来作り上げてきた政治経済システムの全面的な承認と宣揚の場へと変化する。その際、「勤勉革命」というキーワードが、その最初の命名者である川勝平太による「文明の海洋史観」の意図を離れて、小農経済と金融システムに支えられた現代中国の政治技術を肯定する目的に援用されていることには注意する必要があるだろう。

³⁷ 韓毓海：『五百年來誰著史——1500年以来的中国与世界』、頁219-220。

³⁸ 韓毓海：『五百年來誰著史——1500年以来的中国与世界』、頁195。

『500年間、誰が歴史を書いたのか』が、中国国民総生産世界第2位へと躍進する時期に上梓され、大きな注目を集めたのは偶然ではない。中国共産党の政治技術の有効性を説き、中国型「勤勉革命」の文化ヘゲモニーの存在意義を強調する本書は、その主張の当否はともかく、中国経済が世界の主役に躍り出た時代のイデオロギーを雄弁に説く書物として長く語り継がれるだろう。

竹内好、胡適、川勝平太、韓毓海という日中の思想家によって、奇しくも「アジアの想像」が「現実のアジア」へと転換される思想的現場を見てきた。見えにくくはあるが、アジアの人々の知的営みは、アジアに広がる知の共同体という「現実のアジア」を踏まえることを決して忘れたわけではない。その事実が、アジア主義の登場以来、アジアにおける「普遍的近代」の実現に挫折してきたわれわれに1つの啓示を与える。♦

引用書目

Arrighi, Giovanni et al. (eds.)

- 1999 *Chaos and Governance in the Modern World System* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1999)

Dewey, John

- 1929 *Characters and Events: Popular Essays in Social and Political Philosophy*, Joseph Ratner (ed.) (New York: H. Holt and company, 1929)
- 1978 "The One-World of Hitler's National Socialism," in Jo Ann Boydston (ed.), *The Middle Work, 1899-1924*, Volume 8 (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1978), pp. 421-426

Hu, Shi

- 1933 "Types of Cultural Response," 『胡適全集』、季羨林（編）、（合肥：安徽教育出版社、2003年）、第40巻
- 1938 "The Westernization of China and Japan," 『胡適全集』、季羨林（編）、（合肥：安徽教育出版社、2003年）、第37巻
- 1940 "To John Dewey," 『胡適全集』、季羨林（編）、（合肥：安徽教育出版社、2003年）、第37巻
- 1941 "The Conflict of Ideologies," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 218 (Nov., 1941), pp. 26-35
- 1942 "China too Is Fighting to Defend a Way of Life," 『胡適全集』、季羨林（編）、（合肥：安徽教育出版社、2003年）、第38巻

Pomeranz, Kenneth

- 2000 *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2000)

上田信 Ueda, Makoto

- 2009 「文明史としての中国近現代史」、飯島渉・久保亨・村田雄二郎（編）『シリーズ 20世紀中国史 4 現代中国と歴史学』（東京：東京大学出版会、2009年）、頁153-175
- "Bunmeishi toshite no Chūgoku kingendaishi," in Ijima Wataru, Kubo Tooru, Murata Yujiro (eds.), *Shili-zu 20seiki Chūgokushi 4 gendai Chūgoku to rekishigaku* (Tokyo: Tokyo daigaku chuppankai, 2009), pp. 153-175

川勝平太 Kawakatsu, Heita

- 1997 『文明の海洋史観』 (東京: 中央公論社、1997年)
Bunmei no kaiyō shikan (Tokyo: Chūō Kōronsha, 1997)

加々美光行 Kagami, Mitsuyuki

- 2008 「現代中国学の新たなパラダイム——コ・ビハイオリズムの
 提唱」、『現代中国学の新しいパラダイムをめぐって』
 (2007年度国際シンポジウム報告書) (愛知: 愛知大学国際
 中国学研究センター、2008年)、頁161-189
 "Gendai Chūgokugaku no aratana Paradaimu——Ko・
 biheiorizumu no teishō," *Gendai Chūgokugaku no atarashi
 Paradaimu wo megutte* (2007 nendo kokusai shinpojiumu
 hōkokusho) (Aichi: Aichidaigaku kokusai Chūgokugaku kenkyū
 sentā, 2008), pp. 161-189

石井知章 Ishii, Tomoaki

- 2012 『中国革命論のパラダイム転換——K・A・ウィットフォー
 ゲルの「アジア的復古」をめぐり』 (東京: 社会評論社、
 2012年)
*Chūgoku kakumeiron no Paradaimu tenkan —— K・A・uittofōgeru
 no 'Ajia teki fukko' o meguri* (Tokyo: Shakai hyōronsha, 2012)

竹内好 Takeuchi, Yoshimi

- 1980 『竹内好全集』 (東京: 筑摩書房、1980年)
Takeuchi Yoshimi zenshū (Tokyo: Chikuma shobō, 1980)
 1993 『日本とアジア』 (ちくま学芸文庫) (東京: 筑摩書房、
 1993年)
Nihon to Ajia (Chikuma gakugeii bunko) (Tokyo: Chikuma shobō,
 1993)

汪暉 Wang, Hui

- 2006 「アジア想像の政治」、村田雄二郎・砂山幸雄・小野寺史郎
 (訳) 『思想空間としての現代中国』 (東京: 岩波書店、
 2006年)、頁115-189
 "Ajia sōzō no seiji," in Murata Yūjirō, Sunayama Yukio, Onodera
 Shiro (trans.) *Shisō kūkan toshite no gendai Chūgoku* (Tokyo:
 Iwanami shoten, 2006), pp. 115-189

坂野潤治 Banno, Junji

- 2013 『近代日本とアジア——明治・思想の実像』 (ちくま学芸文
 庫) (東京: 筑摩書房、2013年)
Kindai Nihon to Ajia——Meiji・shisō no jitsuzou (Chikuma
 gakugeii bunko) (Tokyo: Chikuma shobō, 2013)

周質平 Zhou, Zhiping

2002 『胡適与中国現代思潮』 (南京: 南京大学出版社、2002年)
Hu Shi yu Zhongguo xiandai sichao (Nanjing: Nanjing daixue
 chubanshe, 2002)

武田清子 (編) Takeda, Kyoko (ed.)

1961 『思想史の方法と対象』 (東京: 創文社、1961年)
Shisōshi no hōhō to taisou (Tokyo: Sobunsha, 1961)

柄谷行人 Karatani, Kōjin

2004 『歴史と反復』 (『定本 柄谷行人集』、第5巻) (東京:
 岩波書店、2004年)
Rekishi to hanpuku, in *Teihon Karatani Kōjin shū*, Volume 5 (Tokyo:
 Iwanami shoten, 2004)

胡適 Hu, Shi

2003 『胡適全集』、季羨林 (編) (合肥: 安徽教育出版社、2003
 年)
Hu Shi quanji, Ji Xianlin (ed.) (Hefei: Anhui jiaoyu chubanshe,
 2003)

梅棹忠夫 Umesao, Tadao

1967 『文明の生態史観』 (東京: 中央公論社、1967年)
Bunmei no Seitai shikan (Tokyo: Chūō kōronsha, 1967)

緒形康 Ogata, Yasushi

2013 「一九三〇年代の封建遺制論争、資本主義論争におけるアジ
 アの影」、緒形康 (編) 『アジア・ディアスポラと植民地近
 代——歴史・文学・思想を架橋する』 (東京: 勉誠出版、
 2013年)、頁193-219
 "1930 nendai no Hōkenisei ronsō, Shihonshugi ronsō ni okeru Ajia
 no kage," Ogata Yasushi (ed.), *Ajia diasupora to shokuminchi kindai*
 —rekishi · bungaku · shisō o kakyōsuru (Tokyo: Bensei shuppan,
 2013), pp. 139-219

裴京漢 Pae, Kyōnghān

2012 「東アジア史上の辛亥革命」、辛亥革命百周年記念論集編集
 委員会 (編) 『総合研究 辛亥革命』 (東京: 岩波書店、
 2012年)、頁41-64

"Higashiajishi jō no Shingaikakumei," in Shingaikakumei
 hyakushūnen kinen ronshū henshū iinkai (ed.), *Sōgō kenkyū*
Shingaikakumei (Tokyo: Iwanami shoten, 2012), pp. 41-64

韓毓海 Han, Yuhai

2009 『五百年来誰著史——1500年以来的中国与世界』 (北京:九州出版社、2009年)

Wubainianlai shei zhu shi——1500 nian yilai de Zhongguo yu shijie
(Beijing: Jiuzhou chubanshe, 2009)